

## 授業方法について独自に工夫していること 【人文社会学系】

アクティブラーニングを意識して、学習者主体の授業を行っている。  
発表形式をとっているため、学生たちの発表の前には、授業時間以外に個人的に指導・助言をしている。  
学習者自身が満足でき納得がいく発表をすることができるように、授業時間外の時間で発表練習の工夫、および、発表の仕上げを行っているので、その指導をしている。  
学生たちが授業内容を深めあえるために、発表内容を毎時間書かせ、グループでの合評会も行っている。

・学生さんたちが普段触れにくい情報に触れたり、多様な進路を見据えられるよう、多様な働き方をしている大人と関わることを通じて、児童・生徒たちの進路指導・キャリア教育・職業指導をより具体的に考えられるようにした。  
・グループでのディスカッションを多く取り入れることで、自分たち自身で進路指導・キャリア教育の課題に気づき、考えを深められることを目指した。

・前半では講義形式でキャリアの理論について学習し、中盤ではそれを生かして自己の問題を考えるワークを実施することで、理論を踏まえた支援の方法について、より具体的に理解できるようにした。  
・ゲスト講師をお招きすることで、社会に出た時を具体的にイメージできる機会を創るとともに、具体的にどのような行動を起こしたらよいか考えるきっかけになるような講義を行うようにした。  
・グループワークを通じて、学生同士のコミュニケーションを図るとともに、身近な地域課題について、具体的にプランを練ってもらうことで、社会に出た時に講義での学びをどのように生かせるのか考える場を設けた。

出席状況とレポートのできばえ。

テキストの丁寧な読解と解説。  
配布プリント等、補助教材の作成。  
新聞記事、雑誌記事等を活用した、現在の教育との関連づけ。  
ディスカッションによる、双方向的な授業の工夫。

一番目は卒論用ゼミだが、報告を受けて対話するのを基本とし、ともに問題点や解決策をさぐっている。  
二・四番目は、研究室ウェブサイトからリンクしてある動画講義(ユーチューブ)を活用。  
三番目は、リポトリから論文をダウンロードさせて読ませている。  
五番目は、第一班の事前指導を入念に行ない、第二班以降に対しては授業時に適宜留意点を告げている。

データ(図表)を多用して、学生が理解しやすいように工夫した。毎回、コメントシートで質問や意見を提出させ、そこに書かれた質問には次の授業で再度説明した。

国文学講義AI→90名近くの学生に対する授業であったため、意見文などを書いてもらった際には、一方的にならぬよう双方向で意見を紹介できるように心がけた。あるときはプリントで配布し、あるときはPowerPointで取り上げて紹介するなど。  
国文学演習AⅡ→演習授業のため、できるだけ他大学や市立図書館等に足を運び、自ら調べなければならないような課題を提示するようにした。

毎回、史料プリントを3枚ほど用意し、できるだけ丁寧に説明するように心がけている。また、プロジェクターを使用し視覚的にも理解度を深める授業をした。

音声学・音韻論では、実際に音を聞き分けたり、発音し分けたりという実践的なことも必要となるので、音声を聞くテストは必要である(発音させるテストまでは、実施できなかった)。資料を配付することで理解を深めるようにもしている。  
日本語史を教えるのは初めてでもあり、まだ手探りであった。

この授業の形式は、具体的な事例をVTRで示しながら講義を進めるというものである。毎回、授業の始めに、その回の内容やVTRの見所など、授業の目標を明確に提示する。また、授業の受け方、ノートの取り方、授業と試験の関係など、第1回目の授業をオリエンテーションとして丁寧に説明する。ただVTRを見せるのではなく、いかにノートに内容を定着化させるか、そして、いかに内容を具体的に理解させるかというところにもっとも力点を置いている。

日本民俗学の手法による地方史研究の実践という観点から、現地調査を行うための事前調査の方法や技能を身につけることに力点を置いた。授業中に学生が発言する場面を多くするように心がけた。実際に現地の図書館や博物館などに出向き、実物資料にふれることによって資料を収集するように工夫した。授業中の発言・討論への参加度(積極性と内容)や、課題(たとえば、先行研究の文献資料の中から関心を見出し、さらに情報収集を広げる)への取り組みを重視した。

講義形式の授業では、①各トピックスごと受講者各自に問いを自覚的に持たせること、②説明を自身の有する言語辞書と照らして自分のことばで理解し直させることの2点を心掛けている。  
演習形式の授業では、事前に発表担当者と①取り上げるべき問題点、②考察に導くための方法論、③他の受講者を巻き込んで検討させるための問いの準備などに関して1.5H程度の打ち合わせを行っている。演習時にもリアクションペーパーに毎時間、各受講者の疑問点を記させ、発表担当者のみならず、教員も回答を返す形式をとっている。

学生同士の質疑応答がなされることが望ましいと考えているため、学生からの質問が出るまで待つように努めた。

講義の授業では冒頭に、その回のテーマに関心を持たせる発問をし、なぜそのような現象が起こったのかを考えさせる。

日本史探求の基礎となる、史料読解のための和製漢文の読み方を少しでも身に付けてもらうための授業であるが、ただ理屈だけでは「素人」の学生にとって苦痛となってしまうかねない。そのため、なるべく学生が興味関心を持つような人物や出来事についての具体的な史料(ただし、和製漢文の特徴的な要素が多く入っているもの)をセレクトし、時代背景なども絡めて、その中でできるだけ自然に和製漢文に親しめるように考えた。

・歴史学の特質や留意点をなるべく明確に見てとることができるような研究史上のテーマを選び出す。  
・どのような根拠や論理によってある学説がつくられ、どのような理由でそれが批判されたのか、を学生にも理解できるように明確かつ平明に整理し、説明する⇒「絶対の真理」は無いのであり、どのような学説も相対化できることを認識しやすいように講義を進める。

書道演習Ⅱ・Ⅳは、書写に関する理論のほか、実技指導を行う。実技指導では、個別に、学生の実技能力に応じ、課題の克服に向けて指導している。また、ペアやグループで学習内容について話し合いを行ったり、相互批評も取り入れて、指導する際の見方も養うようにしている。

毎回グループ発表を行い、必要に応じてそのための事前指導を個別に行っている。また、発表および教員からのコメントはすべて英語で行うことで、英語によるコミュニケーション能力の向上を図っている。

講義の授業であるが、毎回グループ発表を行い、必要に応じてそのための事前指導を個別に行っている。また、発表および教員からのコメントはすべて英語で行うことで、英語によるコミュニケーション能力の向上を図っている。

・外国史概説Ⅰの授業では、きわめて限定された時間枠(7回)の中で、免許科目として外国史東洋史分野に関する基礎的な知識(中国を中心とする東アジアの古代から近代史)を習得させる必要があるため、内容を精選し、配付資料を極限まで整理した形で作成している。また、少しでも学習内容を定着させるため、できるだけ板書を中心とした授業の展開を心がけている。これは聴覚障害者の受講生に対する配慮でもある。

・東洋史特論Ⅰの授業では、中国古代史の最新の研究成果を中心として、歴史学の方法論を学んでもらっているが、専門外の受講生も多いことから、配付資料を丁寧に作成し、原典史料に書き下し・現代語訳を付すなどしている。

・演習・講読の授業では、学生が課題に対する調査・読解・解釈・報告を行い、また細かくレポートを課すことで、能動的な学びを実践できるよう工夫している。学習効果はきわめて高い。

授業内容の性質から、受講生には授業外での課題をできる限り課し、併せて、教員からは、個々人の内容に対応したフィードバックをするようにしています。

・授業にディベートを採り入れ、学生自身による問題発見、課題設定、事前検討、報告、報告後のふり返しを行わせ、課題に対する理解がより深まるような工夫をした。

・ネット上に授業専用のプラットフォームを設け、レジュメやコメントなど情報共有、意見交換のために活用した。

学生がリアクションペーパーに書いた内容に、次回の授業で応答するなどして、双方向的な授業になるよう工夫している。

3503111 S 国文学講義BⅠにおいては配布資料を工夫し、復習に必要な情報量の提供を意識している。  
4503204 S 国文学演習EⅡ・2501061 S 国文学演習AⅡについては、事前・個別の指導に留意している。

いずれも社会科・地理学の専門にかかわる難易度の高い内容や理論・方法論を中心とした授業であるが、地理学初学者にも理解可能なように、豊富な資料、具体的な事例、わかりやすい説明を心掛けた結果、多くの項目で専攻科目の平均値をはるかに超える高い評価を得た。

学生が主体的に参加できるように工夫している。教師がトップダウンで知識を提供するのではなく、学生に問題点を探させ、それを考え、解決するような方向で授業を構成している。活動の結果を内省、省察する時間を設けている。内省、省察は、レポート、調査(設問に回答する形式)で、行い、これを集計して教師が授業の教育的効果を考察する資料をしている。レポートは、データとして保存分析、設問は統計分析している。結果は、実践報告としてまとめ、キャリアセンターをはじめとする本学の紀要等で公開している。

2413631心理アセスメント講義:学生に自主的に調べ学習させて発表させた。  
2413681心理教育統計学実習:SPSSのソフトの使い方と結果の記述について説明した。

漢文は、日本語訳を読んでもピンとこなかったり、深く理解することができなかつたりすることが多い。そのため、受講者みずから調べて発表を担当し、担当以外の学生も主体的に発表を聞いて異見を言うことができるよう、今回の授業を組み立てた。

講義の科目であるが、主体的な学びを行うため、各回の講義は学生による発表形式にしており、質疑についても発表者が回答する形式にしている。

演習発表をするにあたって、事前の打合せを行っている。

独自だと言えるような工夫は特にない。  
一方的な講義はよろしくないという風潮なので、講義であっても学生同士で考えたことを話し合わせるとか、想定している授業内容を薄めてでも学生の理解度を確認しながらペースを落とすといったことはしているが、どなたでもなさっていることと思う。

演習形式の授業のため、学生の発言を促すための環境作り。具体的には学生の質問・コメントの後に、教員側から補足やフォローをすることにより、学生の発言を孤立化させず、発言しやすくなる環境作りに留意している。

学生自身が、知識を享受する部分と、前で話す部分、自ら作業する部分の3部で展開するように意識している。  
また、ipadを利用し、実際の筆の動きなど、細部の見せ方・提示の仕方も併せて体験させるようにしている。

①②共にパワーポイントに頼ると受け身になりがちとの考えから、しっかり手を動かしてもらうために板書を基準にして授業を組み立てている。  
①については、内容の説明→プリントを配布しての練習問題→問題の解説、を1サイクルとして理解した実感を持ってもらうようにした。

- ・学生が図書館での調査を円滑に進められるよう、授業内で図書館ツアーを行い、辞典類や専門書の位置などを確認した。
- ・学生にワークシートやグループ作業を課す場合には机間巡視を積極的に行い、課題の進行度・理解度を把握するよう努めた。
- ・グループで行う演習発表に際しては、コメントシートに発表についての感想・意見を書いてもらい、個人が特定できないように若干の操作を施したうえで次の授業の冒頭で受講生全員に共有した。またそれを受けた、発表グループによる補足説明の時間を設けた。
- ・学術的なレポートの書き方について再確認するためのプリント、ワークシートを作成した。

概説では毎時間プリントを配布し丁寧な解説を心掛けている。全体で20枚程度になり、テストも教科書だけではなくプリントからも出題している。  
演習では教育実習の予行演習を兼ねて、板書を義務付けている。

主に1年生に向けて、日本文学の近現代の作品を紹介しながら、表現活動と当時の社会背景などとの関係性を学ばせ、自ら考えさせる授業を行っている。  
学生たちは高校時代、文学史を「暗記科目」として捉えていただろうが、本授業では単に事項の暗記ではなく、どういう時代の流れの中で表現や思想が生まれたのかということを改めて学ばせることで、時代を超えて表現・思想を考える応用力を身に付けさせ、現代を生きる教員としての教養を習得させようと試みている。  
また、単に教員の話聞いて終わりにしないようにするため、その日の授業内容に関する課題を出し、授業の後半に学生にコメントを書かせるようにし、翌週の授業でそのコメントに言及する、ということを行っている。

講義形式の授業の場合は、できるだけコミュニケーションペーパーを利用して、毎回の授業に前回のフィードバックを行うようにしている。原書講読に準じる授業の場合は、配布するテキストを自分で作成し、学生のレベルに合わせて適宜注釈や補記をするなどして難易度を調整するようにしている。

授業の5コマに関しては、福祉現場の最前線で働くエキスパートを生きた教材として授業に招き、実践と理論の融合を図り、学習を深めた。

15回の講義では毎回、コメントシートにより学生の感想・疑問点のほか、授業評価と学生の授業取り組み評価を5段階で行わせて提出させている。次時の初めに疑問点を解説し、評価の高い感想を示しながら復習を行いながら前時との関連を示して導入の時間を設けている。また、それらの取り上げる疑問点と感想のほか、授業評価と学生の授業取り組み評価の平均値を資料に明記して配付している。